2018

龍谷大学　社会学部

社会共生実習　活動報告書

発行：2018 年度 龍谷大学社会共生実習運営委員会

2019/3　発行

You,
Unlimited

龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

目次

ご　あ　い　さ　つ 2
地域エンパワねっと 3
（1）取り組みの趣旨・目的 3
（2）2018 年度の取り組みの紹介 3
（3）2018 年度の取り組みの成果と課題 4
里地里山生活史プロジェクト 6
（1）取り組みの趣旨・目的 6
（2）2018 年度の取り組みの紹介 6
（3）2018 年度の取り組みの成果と課題 7
「子どもにやさしいまち」を作ろう 8
（1）取り組みの趣旨・目的 8
（2）2018 年度の取り組みの紹介 8
（3）2018 年度の取り組みの成果と課題 10
The First Aid 11
（1）取り組みの趣旨・目的 11
（2）2018 年度の取り組みの紹介 11
（3）2018 年度の取り組みの成果と課題 11
雑創の森プレイスクールでのプレイワーカー 13
（1）取り組みの趣旨・目的 13
（2）2018 年度の取り組みの紹介 13
（3）2018 年度の取り組みの成果と課題 14
発信情報 15
WEB 15
メディア 15
その他の広報媒体 16

ご　あ　い　さ　つ

2018 年度 社会共生実習運営委員会
運営委員長　　猪瀬　優理

「社会共生実習」は、社会学部全３学科が共同で運営する、社会学部の現場主義を体現する中核となる実習科目です。本実習では、学生たちが大学外部の様々な連携機関と協働して、社会の諸問題に対する理解を現場の中で深め、行動していくことを重視し、所属教員がそれぞれの専門知識やフィールド、人的ネットワークを生かしたオリジナルのプロジェクトを提供しています。社会学部の学生は所属学科を問わず希望するプロジェクトに参加できますので、学生にとっては連携機関の方々との交流だけでなく、学科を超えた学生同士の交流も体験することになります。

今年度の「社会共生実習」は、①「地域エンパワねっと（担当教員：脇田健一、築地達郎、川中大輔）」、②「里地里山生活史プロジェクト（担当教員：笠井賢紀）」、③「「子どもにやさしいまち」を作ろう（担当教員：田村公江）」、④「The First Aid（担当教員：栗田修司）」、⑤「雑創の森プレイスクールでのプレイワーカー（担当教員：持田良和）」というバラエティにとんだ５つのプロジェクトが出揃いました。

本報告書では､各プロジェクトの１年間の活動とその成果を報告させていただきました。報告からは各プロジェクトにおける連携機関の皆さまから多大なるご協力をいただいたことが拝察されます。心より感謝を申し上げますとともに、引き続きご高配を賜りますようお願い申し上げます。

本報告書の内容を通して、現代社会が直面するさまざまな課題や問題を知っていただき、少しでも考えていただけるような機会となりましたら幸甚です。

2019 年 3 月

地域エンパワねっと

担当教員：築地達郎、脇田健一、川中大輔

（1）取り組みの趣旨・目的

地域エンパワねっと（愛称は「大津エンパワねっと」）は 2007 年度、本学部が立地する大津における「地域活性化」、本学部に学ぶ「学生の学びの質的向上」、そして学部における「教学改革」――の 3 つを目的として始まったものである。同年度、文部科学省の「現代 GP」に採択され、学部所属の全学科（当時は 4 学科）の共同プロジェクトとして発足した。学生と地域住民が直接出会い、地域運営のための活動に向けて協力し合うことを通じて、相互にエンパワメント（潜在化した力を引き出すこと）され学び合う関係を創出することを目指した。また、教員が学科の壁を越えて、教育上のコラボレーションをおこなう実験でもあった。本プログラムが起点となり、2016 年度カリキュラム改革において、多くの講義系科目の相互乗り入れと「社会共生実習」の実現につながったといえる。

本プログラムの最大の特徴は、「(学生が取り組むべき）課題をあらかじめ設定しない」ということである。学生が地域住民とともに取り組むべき課題を見つけ出す。これは学生にとっては極めて難易度の高いことである。そこで本プロジェクトでは、担当教員と地域住民のリーダー層（地元自治連合会会長など）とが定期的に（原則毎月 1 回）会合（「大津エンパワねっとを進める会」）を開き、地域の動きや学生の動きを常に共有している。

プログラムは原則として 1 年間で編成される。受講生は、前半は地域における「課題」の発見、後半は発見した課題に対する「解決方策」の立案と実施が求められる。

受講生にはまた、地域活動の成果をわかりやすくまとめて地域住民にフィードバックする「報告会」への参加と口頭報告および文書での報告が求められる。報告会は前期と後期の終盤に各 1 回設定されており、受講生は地域住民の前でプレゼンテーションをおこなう。

地域活動を終えた受講生は、学科ごとに指定された関連科目を単位修得することによって「龍谷大学まちづくりコーディネーター」の認定を受けることができる。

（2）2018 年度の取り組みの紹介

2018 年度は本プロジェクト 11 期生の学生計 12 名が、4 つのグループに分かれて活動をおこなった。

今年度は、複数年履修を促すことを意識し、取り組むべき地域課題の発見にじっくりと時間をかけることを心がけた。前期においては、地域の皆さんとの出会いを通じて地域課題を多角的に知り、それに関する調査を設計して実施することを求めた。後期は前期の活動を通じて絞り込まれた地域課題について、その解決方策を鮮明にするためのプロジェクトを企画し、実施することを求めた。

なお、2016 年度新カリキュラムの下、他のプロジェクトに合わせるため、本プロジェクトへの割り当て単位数が旧カリキュラム比半減している。これに伴い、実習指導のために設けられた授業時間も金曜日１・２講時の 2 コマから金曜日 2 講時のみの 1 コマに半減した。このため、新カリキュラム下で初年度となった 2017 年度に続き、過去に蓄積されてきた運営ノウハウを大幅に見直して実態に合わせていく作業が必要となった。協力いただいている地域の皆さんには試行錯誤に粘り強く付き合っていただいた。

（３）2018 年度の取り組みの成果と課題

上述のように、受講生らには後年度の継続受講を意識して、「地域課題の発見」を重視した活動を求めた。そのため、社会的発信を必要以上に意識した派手な活動はなく、地域の皆さんとの信頼関係をつくりながら、じっくりと取り組むことができた。

具体的には以下のとおりである。

〔瀬田東学区〕

① 「防災活動の日常化」

特定の自治会（学園前コミュニティ自治会）の協力を得て、災害時に必要となる「共助」の精神の基盤となる関係性構築を促す活動をおこなった。地域における定例イベントの中で住民同士が語り合う契機を学生企画によって提供した。

② 「自治会活動への認知の向上」

若年層の自治会離れを食い止めるためには同層の認識を把握する必要があるとして、主に学生に対してアンケート調査をおこない、地元自治会にフィードバックした。

〔中央地区〕

③ 「子どもの孤立」

孤立する子どもをなくすために、地域の子どもたちの「居場所」の実態把握をおこなった。アンケートに加え、子どもたちに地図上に書き込んでもらう「マップ調査」もおこない、子どもの遊び活動の実態を可視化した。

④ 「高齢者の社会的ひきこもり予防」

引きこもる高齢者を減らすためには、そのような状況にある人びとを社会的に「誘い出す」ことが必要であるという仮説に基づき、「料理教室」を企画した。また、住民と学生が共に検討するワークショップを企画実施した。

2019 年度は、社会共生実習全体の構造改革をにらみつつ、より実態に即したプログラム運営に移行する期間になるものと思われる。担当者間、あるいは地域の皆さんとのコミュニケーションを密にしながらも、瀬田東と中央というそれぞれの地域特性や担当教員の持ち味を活かした運営を模索したい。

▼初回授業

▼瀬田東地域デビューで情報収集

▼中央地区　前期報告会

▼瀬田東学区　前期報告会

▼中央地区　活動風景

▼瀬田東学区　活動風景

▼後期報告会

▼お世話になった地域の方との懇親会

里地里山生活史プロジェクト

担当教員：笠井賢紀

（1）取り組みの趣旨・目的

里山は、手つかずの自然とは異なり、人の暮らしが自然と密接にかかわり、自然に影響を与えている場所である。そのため、里山での暮らしは都市部での暮らしと異なり、自然とどのように共生していくかが重要である。他方、里山では高齢化や少子化、あるいは過疎化といった社会的に「問題」とされる状況を他地域に先んじて受けている。

こうした状況において、今もなお里山で暮らしている人たちの、これまでの生活を丹念に聞き記すことを本プロジェクトでは目指した。里山での暮らしを悲観的に見るのでもなく、逆に理想的に描くのでもなく、暮らしている人たちの日々を聞き取って記録し共有するという地道な作業である。

もちろん、里山での暮らしのアーカイブ（記録）としても位置付けられる。同時に、今後、日本の多くの地域が直面する上記のような状況の先進地のありかたを示すものとしても位置付けることが可能だろう。

本プロジェクトを通じて、受講生は自然と人とが共生する社会とは何か、そして人間関係が密な社会における共生とはどういったものかという複層的な「共生社会」像を、聞き取りの実習を通じて学ぶことが企図される。（以上、2017 年度と同様）

（2）2018 年度の取り組みの紹介

昨年度に引き続き石川県能美市仏大寺町という 10 余軒から構成される集落と、本年よりあらたに岐阜県揖斐川町坂内の諸家という集落の 2 箇所をフィールドとした。受講生は第 1 学期を通じて聞き取りの方法や各集落に関して学び、集落とアポイントメントを取った。

今年度の本プロジェクト構成メンバーは昨年度の受講者 6 名のうち 5 名が継続し、新規受講者が 5 名加わって計 10 名であった。これは社会共生実習のプロジェクトの中では継続受講者・総受講者数ともに多い。毎週の実習では継続受講者がリーダーシップを発揮し、新規受講者に経験からさまざまなことを伝えた。10 名がおおよそ半分ずつ、2 集落のどちらかを主担当とすることにし、準備に努めた。

それぞれの集落を夏季休暇中に訪れ、生活史の聞き取りをおこなった。今年度は「食」と「祭り」をテーマとした聞き取りがおこなわれた。その後、後期には冊子制作が始まり、両集落をまとめた一冊の成果物としての完成間近まで近づいたものの、年度末までに完成することはなかった。

なお、諸家集落では聞き取りの対象は 1 名であった。仏大寺、諸家の両集落において、里のイベントに受講生らが参加し、聞き取り結果を還元した。

（3）2018 年度の取り組みの成果と課題

今年度は継続受講生も多く、安心して受講生らの自主性に任せることができる実習であった。残念ながら担当教員は 4 回の訪問（聞き取り＋イベント参加 × 2 集落）のいずれにも参加することができなかった。だが、昨年度と異なり断片的に単語を拾い、短いエピソードとしてまとめるのではなく、できるだけ語りそのものを大切にして成果にしようという丁寧な姿勢が醸成されているように見受けられた。

昨年同様、特に良いと思われるのは、聞き取った内容をそのままにせず、すぐに文字に起こし、わからないことを教員や受講生と確認して簡易版の冊子に仕上げたことだ。それをもって、後期の授業期間中に、語らった相手に直接届けるのは、語り調査をする者にとっては当然にすべきことでありながら、実現するのは容易なことではない。実習を通じて、調査技術や里山への知識だけではなく、人と接する姿勢・態度も培われている様が見て取れる。

本プロジェクトは 3 年度間続ける予定であったが、担当教員が本年度末に退職するため叶わない。　成果物としての冊子が完成されなかったのは残念だが、受講者らの真摯な姿勢を見る限り、次年度、自分たちで制作を続け、完成の暁には現地に届けに行ってさらなる語りを紡ぐのではないかと期待している。

▲成果報告会ポスター

「子どもにやさしいまち」を作ろう

担当教員：田村公江

（1）取り組みの趣旨・目的

「子どもにやさしいまち」とは、子どもの権利を満たすために積極的に取り組むまちのことである。本プロジェクトでは、子ども支援を手掛ける NPO や民間団体と連携して、「子どもにやさしいまち」を作るための学習と実践をおこなう。

（2）2018 年度の取り組みの紹介

①　授業時間内の学習

1）実習についての打ち合わせ等

本プロジェクトでは受入れ先が 4 か所あり、随時、さまざまなイベントが開催されている。授業時間を使ってどの実習に行くのかスケジュールを決め、事前学習をおこなった。

2）実習で得たことを共有するためのミーティング

ホワイトボードを使って、書き手と話し手双方のスキルが伸びるようなミーティングをおこなった。

3）修復的司法の手法の一つ「サークル」の練習

「サークル」とは、地域や学校などで発生する問題について、関係者が輪になって話すことで相互理解の土台を作り、問題解決に参画する手法である。「サークル」をおこなう際には「キーパー」と呼ばれる人がファシリテートを務め、独自のルールに従って対話をおこなう。

4)「子どもの権利」について参考文献から学ぶ

主に『子どもの権利・親の権利』（小沢牧子、1995 年、日外アソシエーツ）を読んで、ディスカッションした。

5)「5 段落エッセーのフォーマット」で文章を書く

学生たちは「5 段落エッセーのフォーマット」を難なく習得し、学習成果をまとめた。

②　実習受け入れ先での活動

子ども支援をおこなっている NPO や民間団体と連携して、子ども支援の現場について学んだ。連携先別に取り組みを紹介する。

1）体罰をみんなで考えるネットワーク

この団体は 2012 年に発生した桜宮高校体罰事件を機に、研究者、スポーツ指導者、子育て支援団体、学校事故・事件（体罰、指導死など）の家族、一般市民などが集って作られた。この団体は年 4 回の定例会を開催して、子どもの人権と体罰問題に関する学習・

啓発事業をおこなっている。受講生らは、定例会の運営スタッフとして参加した。

2）ＣＡＰセンター・ＪＡＰＡＮ

この団体は子どもの権利の尊重、子どもへの暴力防止のために活動している。この団体が開催する講演会や講座に参加して子どもの権利についての理解を深めた。

3）かんちゃんの小さな家

ここでは「かんちゃんホットルーム」というイベントが開催されている。これは、地域の子ども、保護者、お年寄りが集まって交流し、昼食を作って共に食べるというものである。参加する子どもたちは幼児から小学生であり、受講生らは子どもと遊んだり、料理作りや工作などを補助したりしながら、子どもをめぐる問題について理解を深めた。

4）子どもの権利条約　関西ネットワーク

関西の子ども支援 NPO の多くが加盟しているネットワークである。ここが主催した連続講座「子ども条例のつくり方（全 5 回）」に参加した。毎回、第 1 部は実際に子ども条例を作った自治体職員による講演、第 2 部は「コミュニティ・オーガナイジング」という手法のワーキングであった。

③　学生企画

1）「かんちゃんホットルーム」お楽しみ会の企画

受講生同士で話し合った結果、「ペットボトル水族館」（ペットボトルに透明糊と水を混ぜた溶液を満たし、ラミネート加工で作った小さな魚やカラフルなビーズを入れるという工作）に決まった。材料集め、試作、子どもへのイラスト入り説明文の作成などの準備を分担しておこなった。2018 年 11 月 11 日に実施。

2）勉強会

児童福祉の専門家である土田美世子氏（本学社会学部現代福祉学科教授）に「子どもの居場所について」というテーマで講話いただいた。2019 年 1 月 18 日に開催。

3）子どもに関する社会調査の企画

受講生らは、自治体が実施している既存のアンケートを参考にしつつ、盛り込みたい質問について話し合った。質問紙のワーディングやレイアウトについて話し合い、調査協力者への趣意書も作成した。子ども対象であるため、漢字にはルビを振った。平安中学校の協力を得ることができ、平安中学 1 年生 83 名に配布してもらい、83 通を回収した。

④　You, Challenger の活動

1）ワーキング

・2018 年 6 月 8 日に第 1 回ワーキング（カメラ講習会）開催
・2018 年 7 月 12 日に第 2 回ワーキング（文章作成）開催
・2019 年月 6 日に第 1 回プレゼンテーションワーキング（TED 方式プレゼン）開催
・2019 年 2 月 25 日に第 2 回プレゼンテーションワーキング（TED 方式プレゼン）開催

2）活動報告記事のアップ

5 名の受講生が、実習で経験したことを記事にまとめ、写真とともに専用ウェブサイトにアップロードした。

3）プレゼンテーション

・2019 年 2 月 26 日に受講生の瀬戸千絵さんが瀬田学舎キャリアイベントでプレゼンをおこなった。

・2019 年 3 月 7 日に受講生の加藤祐衣さんが平安高校でプレゼンをおこなった。

（3）2018 年度の取り組みの成果と課題

① 授業時間内の学習

実習テーマについて持続的に学ぶことができたのは大きな成果である。課題は、授業時間を効率的に使うために、実習に関する打ち合わせや情報共有、ファシリテーション系の技法に関する練習、文献を読む座学系の学習という 3 つの分野を、もう少し明確に切り分けること。

② 実習受入れ先での活動

さまざまな立場の大人が「聞く気」で講演を聞く姿に、受講生らは大きな刺激を受けた。

受講生の出欠を事前に把握し実習先に伝える作業を確実におこなうことが今後の課題である。

③ 学生企画

主体的に考えること、試行錯誤すること、振り返りから学ぶことができた。

「ペットボトル水族館」には受講生全員が関わることができたが、それ以外の企画には必ずしも全員が関わることができたわけではない。「子どもアンケート」は学年末に実施したので、事後の入力やグラフ化の作業分担に苦労した。

④ You, Challenger の活動

プレゼンをおこなう受講生は、「子どもの権利」という概念について自分の言葉で説明できるようになり、話し方の技術も向上した。

課題は、他の受講生にまでこの成果が波及しなかったことである。

The First Aid

担当教員：栗田修司

（1）取り組みの趣旨・目的

近年、日本だけでなく世界的規模で災害が多発してきている。こうした中で、「自助」「共助」「公助」の視点から消防防災の実態を学び、地域社会における消防防災に関して学生ならではの貢献をすることを目的とする。

（2）2018 年度の取り組みの紹介

人と防災未来センター見学、大阪府津波高潮ステーション見学、京都市市民防災センター見学、消防フェア（湖南広域消防局東消防署）参加、消防救助技術訓練（湖南広域消防局）見学、大津市総合防災訓練（日吉中学校）参加、龍谷大学の防火・防災訓練（前期）にて講習担当、龍谷大学の防火・防災訓練（後期）にて車椅子搬送訓練の実施、龍谷祭実行委員への普通救命講習の補助担当、野洲市民対象普通救命講習（湖南広域消防局東消防署）の補助担当、防災マップ作製支援（野洲第一・第二子どもの家）、野洲市内保育所防災指導の補助担当、京都市東山区包括支援センターケアマネージャー防災講習担当、京都市嵐山地区水害対策の現状視察、岡山県倉敷市および総社市の水害対策および被害状況の視察、ならびにドクターヘリ視察、日本科学者会議近畿地区シンポジウム「豪雨災害・土砂災害―原因と対策―」（龍谷大学）参加、防災士受験、上級救命講習受講

（3）2018 年度の取り組みの成果と課題

昨年度に引き続き、前期では、各種の消防防災関連施設見学を実施し、昨年同様の消防防災の基礎知識を得ただけでなく、2 年次生のために昨年度とは異なる施設見学も実施したので、2 年次生にはより広範な学習となった。また、1 年次生は、2 年次生からの助言があり、学生同士による検討が一層深まった。

2 年次生は、より高度な学習を消防局の協力を得て修得し、龍谷大学の防火・防災訓練や包括支援センターでの講習担当、子どもたちと防災マップの作成、保育所での防災指導補助を通じて消防防災を「教え伝える」技術も学べたことは成果と考えている。

さらに、京都市嵐山地区や、岡山県の倉敷や総社の水害被災地の視察、これらに関連する日本科学者会議のシンポジウム参加により、消防・防災に関わる実際を現地にて観察し分析しうる力を養えたと考えている。

今後は、日本だけでなく海外の現状を考察することと、これまでの成果をまとめること、さらには 2 年次生の研究成果の報告を来年度の課題としたい。

▼本学防火・防災訓練で講師を務める学生

▼本学防火・防災訓練で車椅子搬送訓練を実施

▼野洲子どもの家の防災探検隊で子どもたちに解説

▼岡山県総社市被災地視察

▼防火訪問活動への参加

▼災害についてのワークショップにアドバイザーとして参加する学生

▼学生が小学生にアドバイスして佳作に選ばれたハザードマップ

▼学生が小学生にアドバイスして佳作に選ばれたハザードマップ

雑創の森プレイスクールでのプレイワーカー

担当教員：持田良和

（1）取り組みの趣旨・目的

子どもたちはいま、塾や習い事に時間をさかれ、思いきり遊ぶことができる場所も、自然と触れ合う機会も少ない。この現状を受け、近年、全国的に「冒険遊び場」と呼ばれるプレイパークが増えており、そこでの遊びの提案と指導、これに伴う計画や準備、施設の環境整備などを担うリーダーの育成が急務の問題とされている。

本プロジェクトでは財団法人プレイスクール協会が併設している幼稚園と連携しながら運営する遊び場「雑創の森プレイスクール」において、子どもの自発的活動や支援をするプレイワーカーのもと、子どもと一緒に遊ぶボランティアリーダーとして実習をおこなう。また、この実習のほかに財団法人プレイスクール協会にてプレイワーカーに認定されるカリキュラムも用意されている。

実習を通じて、子どもの活動を支援する技術や知識を身につけ、子どもたちの創造的な遊び場環境を創り出し、どのような遊びの現場でも対応できる「オトナ」を目指すことを目的としている。

（2）2018 年度の取り組みの紹介

まずは、「雑創の森プレイスクール」について、施設の場所や使用方法などの説明を受け、子どもたちの活動について学習した。

本プロジェクトの活動としては、毎週土曜日に活動している「冒険クラブ」と「発明クラブ」に参加することがメインとなる。午前中にプレイワーカーから活動に必要なロープワークや救急法、焚火のつけ方、工具の使い方などを学び、午後から子どもたちとの遊びの活動の中で実践した。

前期は主にプレイワーカーのアシスタントとして活動することが多かったが「ぼうけんにんじゃ」と題して忍者についてのクイズやゲームを考案するなどといった企画も任せてもらうことができた。

夏季休暇中には 2 泊 3 日で行われる「サマーキャンプ」に帯同し、テントの組み立て、食事の準備、海での遠泳、花火やキャンプファイヤーなど、リーダーとして子どもたちを安全に先導することが求められたが、受講生らは問題なく務め上げてくれた。

後期からは、各種遊び活動のプログラムに企画段階から関わることで企画力や創造力などを養い、備品や用具の準備から運営までを補助することが求められるが、今年度は残念ながら後期まで活動を続ける学生はいなかった。

（3）2018 年度の取り組みの成果と課題

自分自身、自然の中で遊ぶ経験をあまりしてこなかった受講生もおり、はじめのうちは子どもの元気さに圧倒されている様子であったが、「雑創の森プレイスクール」でのルールや遊び方を学ぶにつれて、自らリーダーとして安全面に考慮しつつも子どもと同じ目線に立って「うまく遊ぶ」ことができるようになっていった。

また、前述のとおり、前期のうちに企画を任せてもらうこともでき、半年という短い時間ではあったものの、受講生らの成長を感じることができた。

発信情報

WEB

① 龍谷大学社会学部「社会共生実習」公式ウェブページ
ＵＲＬ： http：//www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/

② 龍谷大学入試情報サイト「You, Challenger 未来への挑戦」
Challenger38 として『「子どもにやさしいまち」を作ろう』の情報を提供
ＵＲＬ： http：//www.ryukoku.ac.jp/challenger/

③ 「大津エンパワねっと」公式ウェブページ
ＵＲＬ： http://www.soc.ryukoku.ac.jp/gp/

④ 「大津エンパワねっと」通信
ＵＲＬ： http://www.soc.ryukoku.ac.jp/gp/reports/index.html

メディア

① 2018(平成 30)年 8 月 9 日(木) ／ 中日新聞（この記事は中日新聞の許諾を得て掲載しています）
【プロジェクト】The First Aid

② 2018(平成 30)年 8 月 14 日(火) ／ 産經新聞（この記事は産經新聞の許諾を得て掲載しています）
【プロジェクト】The First Aid

③ 2018(平成 30)年 8 月 24 日(金) ／ NHK－FM（大津）「しが！！防災応援ラジオ」にて受講生がゲストとして出演（聴き逃し配信 ～2018 年 9 月 4 日(火)まで）
【プロジェクト】The First Aid

その他の広報媒体

① 2018(平成 30)年 9 月 28 日(金)発行 ／ 広報誌『龍谷』86 号 ／ 発行元：龍谷大学
【プロジェクト】The First Aid

04 | People, Unlimited

学内を超えて地域防災を学び
在学中に防災士資格を取得

尾崎 勇人 さん
社会学部 社会学科 3年生
兵庫県立伊丹高校 出身

八木 賢志 さん
社会学部 社会学科 3年生
兵庫県立鳴尾高校 出身

大阪北部地震、西日本での記録的豪雨、これまでにない連日続く災害級の猛暑…。2018年の夏は、防災に携わる者にも深く記憶に刻まれる年となった。本学社会学部で学ぶ、尾崎勇人さんと八木賢志さんの二人も例外ではなかった。

その社会学部で「社会共生実習」のプロジェクトの一環として、学生による救命講習等を活かした地域防災活動「The First Aid」(担当教員:栗田修司)が2017年度より開講された。そのなかで彼らは、学内および学外での消防防災にかかわる講習や実践活動を経て、今年3月、3年生の段階で防災士の資格を取得している。

地域防災を語る上で重要なキーワードが「自助・共助・公助」。特に自助と共助に関係する、地元に根付いた防災活動の取り組みとして、滋賀県湖南広域消防局や野洲市消防団などの協力を得て、消防防災の実習をおこなってきた。野洲第一、第二こどもの家に通う小学生とともに生活現場を歩いて防災マップを作る「ぼうさい探検隊」もその一つ。酷暑のなか、地震の揺れに弱いブロック塀や、大雨になると溢れる川の合流地点など、平穏時では見過ごしがちな危険ポイントを探しカメラで記録。その写真を大きな白地図に貼り、注意内容を記入、3日間かけ完成させた。

これは机上の学習では得られない貴重なフィールドワークである。

「暑さで時間配分もうまくいかず予定していたルートの半分ほどしか回れませんでした。グループ10名に与えられた500円(総額)で、自分達が生き延びるために何が必要かを考えてコンビニで買うという課題もあり、小学生達が何を選ぶか興味がありましたが、なぜかイカの燻製でした」(尾崎さん)

「防災において重要なのは、世代を問わず誰とでもコミュニケーションができる能力です。これまでに幾度か避難訓練を体験したなかで実感したのですが、学生という身分だからこそフットワーク軽く、困っている人がいたら柔軟に動けることが結構あるんです。若いから体力もありますしね」(八木さん)

ちなみに八木さんの子どもの頃からの夢は消防士。卒業後、二人は社会や企業の防災リーダーとして活躍することだろう。

尾崎 勇人さん　八木 賢志さん